The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	”lan lang”と”lumad”の間 : フィリピンの国民統合における中国系フィリピン人の位置づけをめぐって
Author(s)	宮原, 曉
Citation	第1回 フィリピン研究会全国フォーラム抄録集. 1996, p. 21-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100251
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

"lan lang" と "lumad" の間
―フィリピンの国民統合における中国系フィリピン人の位置づけをめぐって

宮原　曉（東京都立大学・院）

導言

冷戦構造が崩壊し、アセアン諸国が欧米とも拮抗し得る政治勢力として脚光を浴びつつある今日、東南アジアにおける中国系住民の位置づけも、変化の岐路にさしかかっている。アセアンのイデオロギー的な基盤である「マレー・ワールド」の思想は「西欧近代」とともに、「中華世界」を対立軸にすえることでなりたってきた。東西のイデオロギー対立が事実上、消滅し、かつて脅威の対象でしかなかった中国が、新たな意味を持って東南アジア諸国の前に姿をあらわしたことで、「マレー・ワールド」と「中華世界」の対立も、変更をせまられているのである。

本報告では、こうした「マレー・ワールド」と「中華世界」の関係の将来を遠目に見すえつつ、フィリピンの場合を例に、中国系住民が現地社会において、いかなる位置づけを要求しているか、また、そうした要求がどのような政治的コンテクストにおいてなされているかについて、現地調査（主にセブ市の中国系住民を対象）の成果を交えながら論じたいと思う。

1．問題の所在

1994年と1995年、中国系フィリピン人の国民統合に関する二つの会議がフィリピンで開かれた。ひとつは、1994年８月の "First National Conference of Chinese Filipinos"（菲律濱華裔青年聯合會［Kaisa para sa Kaunlaran］主催）であり、もうひとつは1995年11月の "National Conference on 'The Ethnic Chinese as Filipinos'"（The Philippine Association for Chinese Studies主催）である。二つの会議で注目すべき点は、そこで中国系フィリピン人をエスニック・グループと観る視点が示されたことである。

以下では、中国系フィリピン人のエスニック・グループとしての認知の問題に焦点をあて、「エスニック・グループ」の概念の多様性、政治性を意識したうえで、１）マレー系フィリピン人の視点、２）エスニック・グループとしての認知を求める中国系住民の視点、３）一般の中国系住民の視点の３つ視点から、「エスニック・グループとしての中国系住民」に作用する国家や民族のイデオロギーについて考察していこうと思う。なおエスニック・グループとしての中国系フィリピン人に対する政府の視点に関しては紙幅の関係上、本抄録集では割愛し、口頭発表のみとする。また、[Carino 1994]もあわせて参照されたい。

2．マレー系フィリピン人の視点 ― katutubo、そしてlumad

今日、フィリピンでは中国系住民をエスニック・グループとして認知する法的枠組みは存在していない。しかし、このことはにエスニック・グループを認知するマレー系フィリピン人の枠組みの欠如を意味するわけではない。各々の社会は文化的に規定された人間認識、もしくは民族認識の枠組みを持っている。このような民族認識の枠組みは、ときに法的な枠組み以上の影響力を持つ。この節では、エスニック・グループに関するマレー系フィリピン人の民俗概念として、タガログの "katutubo" とセブアノービサヤンの "lumad" を取り上げ、その性格に

ついて論じてみたいと思う。

「エスニック・グループ」を意味するタガログの民俗概念は“katutubo”である。この語の意味は「その場所で育つこと」であり、地面から草木が生えるイメージである。こうして、エスニック・グループとしてのタガログは“katutubong Taal”となる。

また興味深いことに、katutuboの概念では地縁性の原則が血縁性の原則に優先される。例えば、タガログ地域で育ったセブアノを両親に持つ子どもは“katutubong Taal”となる。

特定の土地で生まれ育った者がその土地の“katutubo”となるという原則に従えば、フィリピンで生まれ育った中国系住民は“katutubong Tsino”と呼ばれて、一見、不思議はないように思われる。しかし、“katutubong Tsino”という用法はかなり不確定な要素を持っている。ある情報提供者は、中国系住民が“katutubo”になる要件として、2・3世代居住することを挙げているが、この点での共通の認識は存在していない。

一方、“katutubo”における地縁性優位の原則に従えば、“katutubong Tsino”が特定地域に居住することで、その土地の“katutubong Taal”となること、もしくはその逆が生じるはずである。あるいはタガログ地域に居住することで、“katutubong Taal”となるならば、中国系住民は長期の居住によって、“katutubong Tsino”の段階をとび越えて“katutubo ng Taal”となりそうである。しかし、いずれの場合も、現実にはそうはなっていない。

“katutubo”の概念のゆらぎはムスリム・フィリピノや外国人の場合を考慮すると、よりはっきりする。ムスリム・フィリピノの場合、中国系フィリピン人と同様に、その土地で育っても、当地の“katutubo”となることはない。またフィリピン以外の国のエスニック・グループに関して、例えば、“katutubong Hapon”という呼び方は一般的ではない。これらの点から判断すると、“katutubo”という概念自体、「フィリピンの大地」とでも言うべき前提 ── ここでの「フィリピン」はマレー系フィリピン人の考える民俗概念としてのフィリピンであるが ── を含んでいるようである。次に、“katutubo”とほぼ同じ意味内容を持つセブアノの“lumad”の概念について検討してみよう。

“lumad”の概念は、“katutubo”の概念と同様に土地を基準にした概念であり、“lumad nga taga-Sugbu”（セブアノ）といった使い方をする。“lumad”の概念に関して興味深いことは、単に生まれ育つことのみならず、祖先代々その土地に住んでいることが“lumad”の条件となっている点である。このため“katutubo”と異なり、“lumad nga taga-Sugbu”の子どもは、マニラで育っても、“lumad nga taga-Sugbu”のままである。ここでは特定の土地に移住して、数世代を経過することで、その土地の“lumad”に変化していくのである。

“lumad”の概念における、このような地縁性と血縁性の特殊な結合様式は、セブアノの後産処理儀礼に観ることができる。セブアノは出産とともに出てきた胎盤を、軒の雨だれが落ちるところよりも家屋側の地面か、戸口に向う梯子の下に埋める。このことは、子どもが旅に出て行っても、最終的にその土地に帰ってくることを意味するとされる。“lumad”の概念が含む血縁性は、こうして土地のイデオロギーと結合するのである。

このようにkatutubo、およびlumadの概念では、移動にともなう帰属の変更をある程度許容しながらも、対象となる集団との社会的距離に応じて、排除の原則を作用させる。中国系住民の国民統合を阻害するのは、このようなマレー系フィリピン人と土地を文化的に結びつける観念においてであると言えよう。次に、エスニック・グループとして中国系フィリピン人の認知を求める論理が、いかに人と土地を結びつけるイデオロギーの克服をめざしているか、検討し

てみよう。

3．エスニック・グループとしての認知

戴國輝は、東南アジアの中国系住民と現地社会の新たな関係の構築を模索するなかで、漢族の「血筋」という観念と、当該国民国家の一員としての統合を明確に区別するよう提唱し、ソシアル・アイデンティティもしくはカルチュラル・アイデンティティとポリティカル・アイデンティティを区別する必要性を主張している[戴國輝 1980: 22-23]。この観点から、主に現地生まれの現地国籍を持つ中国系住民のアイデンティティに関して、当該国民としての政治的立場を明示した概念が「華人」の概念である。

中国系フィリピン人の場合も、1970年代から「華人」概念の導入がはじまった。しかしながら、その導入のされ方は、戴國輝のアイディアとはかなり異なっている。マルコス政権下の大量帰化政策によって、フィリピンの中国系住民は他の国民と変わらぬ権利を保証された。このため「華人」概念は国民としての権利の強化ではなく、法的側面以外の問題 ── 例えば偏見の問題の解消と、漢族としてのアイデンティティの確認を主眼として導入された。こうした漢族としてのアイデンティティの確認は、戴が政治的アイデンティティとの切離しをはかった血縁的、文化的アイデンティティに回帰するものである。

こうした「華人」の概念をフィリピンに導入したのは、マッカーシである。彼によると“Ethnic Chinese”とは「中国系移民の子孫であり、ある程度、中国語を使用することができ、中国的伝統を継承する、中国系として自他ともに認められる人々」である[McCarthy 1974:1]。マッカーシー以後、「華人」の概念は、さらに漢族文化の側面を強調したかたちで精微化されていく。1980年代に入って登場する「エスニック・グループとしての華人」という発想は、漢族アイデンティティを強調する「華人」概念の延長線上にあるのである。

こうして登場した「エスニック・グループとしての華人」という視点は、東南アジアにおける中国系住民の新たな国民統合の枠組みを示している。戴の主張した「華人」の概念が現地社会との地縁的結合を強調することで、中国系住民が東南アジアの国民国家のなかでの政治的アイデンティティを確立する理論的根拠となった。「華人」の概念は近代国民国家の概念に対するアンチ・テーゼとなっているのである。これに対して、「エスニック・グループとしての華人」という視点は、“katutubo”、“lumad”、さらにはブミプトラといった中国系住民をマレー系住民の土地から排除するイデオロギーに対するアンチ・テーゼとなっている。多民族国家の枠組みのなかで、中国系住民と土地との地縁的結合を主張することで、文化的アイデンティティを保持したまま、国民統合していく理論的根拠となっているのである。

このような「エスニック・グループとしての華人」という視点は、人と土地との結合を前提とすることで、近代国民国家のイデオロギーや、“katutubo”、“lumad”の概念、さらには先住民権運動の思想と共通の認識基盤のうえに立つ。このため「エスニック・グループとしての華人」の認知要求は、民族運動の視点から観た場合、分が悪い。近代国民国家のイデオロギーや、“katutubo”、“lumad”の概念、先住民権運動の思想に共通する認識基盤では、「土着性」ということが重視される。しかし、中国系住民は、この「土着性」とは相いれない「移民」という属性によってとらえられているのである。最後に、中国系住民のエスニック・グループとしての認知をめぐる議論から離れて、一般の中国系住民がどのような枠組みのなかで、彼ら自身をとらえているか、みていくことにしよう。

4．中国系住民の視点

マレー系フィリピン人がエスニック・グループに関する独自の民俗概念を持っていたように、中国系の住民も彼ら自身の認識枠組みに基づいて、中国系住民とマレー系住民の関係を認識している。フィリピンの中国系住民は、彼ら自身のことを“lan lang”と呼ぶ。“lan lang”とは、原義的には「われわれの人々」を意味する福建語である。ある個人が“lan lang”であるかいなかは、本人の意識もさることながら、他の人々によってその人物が“lan lang”と認識されることを要件としている。混血の有無や国籍、言語などの要因は決定要因とはならない。

“lan lang”という範疇は、“lan lang”－「蕃仔」（huan-a）という人々の認識枠組みに基づいて成立している。ここで「蕃仔」とは原義的に、「野蛮人」を意味し、非華人系のフィリピン人に対する蔑称であった。しかし、今日、「蕃仔」の語は、フィリピノ語を「蕃仔話」（huan-a oe）と表現するなど、応用範囲が広がっている。あるいは蔑称としての意味あいは、すでに薄らいでいると言えるかも知れない。

“lan lang”の範疇が人々の他者認識にもとづいている以上、その基準は主観的であり、流動的である。しかしながら、それゆえに“lan lang”と「蕃仔」の区別は明確になされ得る。“lan lang”かいなかを判断する基準は曖昧にされたまま、“lan lang”と「蕃仔」のいずれかに分類することのみが中国系フィリピン人の関心の対象となるからである。

このように中国系フィリピン人による民族認識、人間認識は、中華思想の現代版とも言える“lan lang”と「蕃仔」という認識枠組みに基づいている。そこには“katutubo”や“lumad”、さらに近代国民国家に観られるような土地と人との結合はみられない。むしろ、“lan lang”と「蕃仔」という枠組みがまず存在し、疑似血縁的な範疇が成立している。

実際のところ、フィリピンの一般の中国系住民のなかで、エスニック・グループとしての中国系フィリピン人の認知を求める運動は、未だ著しい盛り上りを見せるには至っていない。日常生活のなかで、「華人」の語が使用される場面も皆無に近い。そうした背景には、“lan lang”の概念による中国系住民の自己認識が存在すると言える。もとよりここで私は、“lan lang”の概念によって「土着性」のイデオロギーを克服せよと主張するつもりはないが、「土着性」のイデオロギーを相対化するうえで、“lan lang”の概念はひとつの視点を提供すると思われる。

結語

フィリピンにおける中国系住民の位置づけは、単に中国系住民とマレー系住民の現実的な関係のみならず、“lan lang”と“lumad”といった彼ら自身の自画像を含んだ民族的な認識枠組み、さらには「マレー・ワールド」と「中華世界」、「近代国民国家」といった三つの世界観が交錯するところにおいて考える必要がある。

東南アジアの中国系住民は、歴史的に移動のなかにあった。こうした移動性は、植民地時代のコスモポリタニズム的風潮のなかで、基本的に許容されていた。1930年代のセブにおける中国系住民は、アメリカ人やイギリス人、インド人、セブアノとともにコスモポリタンの一員として位置づけられている。

しかし、コスモポリタンとしての中国系住民の地位は、戦後、ポスト・コロニアリズムの時代を向えるにいたって一変する。フィリピンが国民国家として独立するにともない、雑多なものを許容するコスモポリタニズムは他国民を排除するナショナリズムにとってかわられたので

ある。このナショナリズムは、独立する側から言えば、「自分たちの土地」に対する権利の主張の、逆に旧植民地統治者側から言えば、新興国家と国民を結びつけることによる新たな管理体制を確立するという政治的な妥協の産物と考えられる。この地点において、歴史的に移動性に根拠をおく中国系フィリピン人は排除されたのである。

確かにナショナリズムによる中国系フィリピン人の排除は、マルコス政権下の大量帰化政策によってその法的な根拠を失った。しかし、感情的な側面は、"katutubo"や"lumad"といった人と土地を結びつけるイデオロギーによって、解消されず残っている。「エスニック・グループとしての華人」という視点が、中国系住民のフィリピン国民としての新たな「土着性」を模索する主張として登場するのはこのためである。

コスモポリタニズムが植民地主義のいわば徒花であったように、人と土地とを結びつける「土着性」の神話は、ときとして美しき暴力となる。「土着性」のイデオロギーは、移動性を生活の基盤にすえる人々を、国民国家の枠組みから排除するからである。この点で、人類学の責任は大きい。従来の人類学は「土着性」をことさらに美化し、民族の概念の根本にすえることで、移動性を基礎にもつ人々の排除に手を貸してきたのである。こうして、"lan lang"や"lumad"といった概念を手がかりに、「土着性」のイデオロギーに根拠をおく人類学の民族概念を相対化し、人の移動を正しく理解するための新たな民族概念を模索することが、社会人類学の課題のひとつとなるのである。

参考文献

Ang-See, Teresita

1990 The Chinese in the Philippines: Problems and Perspectives. Manila: Kaisa para sa Kaunlaran, Inc.

Carino, Theresa C.

1994 'State Ideology, Policies and Ethnic Identity: The Case of the Chinese in the Philippines.' Ang See, Teresita & Go, Bon Juan (eds.) The Ethnic Chinese: Proceedings of the International Conference on Changing Identities and Relations in Southeast Asia. Manila: Kaisa para sa Kaunlaran, Inc. pp.149-155.

McCarthy, Charles J.

1974 'The Chinese in the Philippines.' McCarthy, Charles J. (ed.). Philippine Chinese Profile Essays and Studies. Manila: Pagkakaisa sa Pag-unlad, Inc. pp.1-32.

Sy, Joaquin

1991 Tamad nga ba si Juan? : At Iba pang Sanaysay at Salin. Manila: Kaisa para sa Kaunlaran, Inc.

戴國煇

1980 『華僑 ― 「落葉帰根」から「落地生根」への苦悶と矛盾』研文出版